

INTRODUCTION

——とある派遣社員のありがちな日常——

世の中には、「派遣会社」というものがある。

「能力」を持った人間を、「しかるべき職場」に派遣し、案件を処理させるというアレだ。

終身雇用制度が過去の遺物となりつつある今、こうした派遣会社と、これに登録する派遣社員は、次第にその数を増やしている。

業務内容は様々。一日いくらの土木作業。オフィスの味方、事務処理代行。資格や経験が物を言うSE、営業、宣伝、法務なんかは、下手すると正社員より良い給料が出ることもある。荒っぽいところでは保安や警備なんか慢性的に人手不足らしい。

絶賛就職活動中の貧乏学生たるこのオレが、急な深夜警備のオシゴトを回してもらえたのも派遣会社に登録していたおかげ。面接やら試験やらでバイト探しなどに時間を費やしている暇のない今の時期、都合の合う仕事を紹介してくれるシステムは大変ありがたい。これでどうにか月末の家賃水道光熱費は賄うことができそうだ。

……とはいえ、深夜の警備なんて暇なもんだ。

閑散とした宿直室の中、オレは大きく欠伸を一つした。……そして流れるようにポケットからスマホを取り出してしまふ。現代人のサガってやつだ。まあ巡回時間じゃないし、この位は構わないだろう、と心の中で言い訳しつつメールのチェック。

「おっ!？」
真っ先に目に飛び込んできたのは〈××社採用結果通知〉〈〇〇社採用試験結果のお知らせ〉の2通。いずれも先週面接してきた会社。筆記と

神様仏様……!
祈りながらメールをタップ。

〈今回は残念なが
次。

〈今回はご縁
はい、22連敗。

『今年の景気は上昇傾向、新卒就職率は売り手市場!』などと言う浮かれた風は、少なくともオレの周りには吹いていなかった。

打ちのめされつつも3通目をチェック。この仕事を回してくれた派遣会社の担当からだ。

〈就職活動の調子はどう?〉

今、討ち死にしたところです。

〈売り手市場って言われてるけど、大手の倍率は相変わらず厳しいから、めげずに頑張りなさいね〉
落ちてるの前提ですか?



〈いざとなったら、ウチでずっと働いてくれないんだし〉

いや、できればちゃんと就職したいです。

〈……それはそうと、今夜の仕事の件で、調査部から気になる情報が入ってきたんだけど〉

嫌な予感しかしません。

〈どうも、依頼人の会社、裏で怪しいブツを扱ってるみたい〉

え、怪しいってナニ?

〈昨日、倉庫に現れてたっていう

不審者は、どうもそれを狙ってるらしいわね〉

ねえ、怪しいってナニ?

〈倉庫では目的のブツが見つからなかったから、次はキミのいる本社社屋がアブない、と〉

だから、怪しいって……いや、もういいや。

……要するに、だ。

依頼人も狙われてるのを承知で臨時の警備員を雇ったと。それも、ウチみたいな派遣会社に。

と、妙に得心がいった所で。

がしゃん、と何かが割れる音が、かすかにオレの耳に届いた。

……タイミング良過ぎじゃない?

宿直室をすべるように飛び出て音のした方へ。窓が割られたのだろう、夜の空気が流れ込んでびゅうびゅうと音を立てている。風の流れを辿り行き着いたのは『社長室』と記された扉。忍び足で距離を詰める。奥からガサゴソと、何かをまさぐる物音。……一息を飲み。

「そこまでだ! 大人しくしろ!」

警告とともに室内に突入、業務用懐中電灯のまばゆい光を抜き打ちで部屋の中に叩きつける。——次の瞬間!

ダァン
物騒な音。
右手に衝撃。不意に重さを減じる懐中電灯。そして一瞬にして再び暗転する室内。

——状況確認。部屋の中に全身黒ずくめのどデカイ暗視ゴーグルを装備した男がいた。そいつが振り向きざまに拳銃を撃ち、オレの懐中電灯を正確に撃ち抜いたのだ。オイオイ、こんな街中で迷いなくぶっ放すってどんだけ、とツッコむ暇などなく即座に判断、突進。第二射が来る前に至近距離に飛び込み、男の襟首に掴みかかる——

「……っ!!」

カウンター気味に腹に拳。重くて鈍い衝撃が伝わって来る。捻りの効

いたえげつないボディブロー。夕飯のコンビニ弁当を戻しそうになったがなんとか堪える。男は深追いせず機敏に後退。オレの伸ばした腕は空しく空を切った。ちっくしょ。

割れた窓からはわずかな星の光。——目が慣れてきた。闇の中に浮かぶ男の姿。鍛え上げられた肉体、統制された身のこなし。油断なく拳銃を構え直し距離を取っている。

暗視ゴーグルがオレを捉える。そこから読み取れるのは……かすかな当惑。

「今で落ちねえとは、さては同業者か?」

押し殺した声で尋ねてくる。まあ、あの一撃を受けて立っていられた奴はそうはいないだろう。ついでに言えば、闇の中で敵を正確に捉えられる奴も。

「どうやらそのようで」

いちいち応える義理はないんだが、つい反応してしまう。

「……察するにそちらは軍人くずれの"個人業者"さん? できれば、おとなしく手を引いてくれると嬉しいんだけど」

話が通じるなら、もしかしたら穏便に済ませられるかも知れないし。

「馬鹿を言うな」

オレのそんな甘い期待は二秒で砕かれた。

「コソ泥同然のしょうもない仕事ばかりで退屈していたところだ。同業者とあらば遠慮はいらん。思う存分やらせてもらうぞ」

闘争心が有り余ってます、とばかりに首をゴキリと鳴らす黒づくめ。

……やっぱダメか。この業界、オレみたいにやむなく所属しているのもいれば、コイツみたいに好き好んで身を置いているヤツもいる。

——やるっきゃねえな。

オレが覚悟を決めたのを認めるや、ヤツは即座に攻撃を開始する。正面構えから正確無比の三射。そのまま社長用の豪勢な机の陰に

横っ飛びして陣地を確保するさまは、まさしく訓練された軍人の身のこなし。

闇の中での正確無比な射撃。常人なら知覚すら出来ず致命傷となっただろう。

だが、オレは常人じゃない。

集中。引き絞られる瞳孔。全身の毛が逆立つ。意識が研ぎ澄まされ、時間が鈍化する。弾道をしっかりと見据えて、後肢のバネを解放し跳躍、飛び越える。うねる背中と肩の筋肉。拳を振り上げ——

着地ざまにヤツの潜む社長の机に叩きつけた。轟音。撒き散らされる木片。吹き飛ばされる拳銃。

「その馬鹿力、暗視能力……貴様、"獣人"か!」

間一髪逃れたヤツが、即座にナイフを抜き放つ。

「まあ、そういうことになるかな」

そう、オレ……いや、オレ達は人にはない"力"を持っている。

常人の三倍のスピードで処理を済ませる事務能力だとか、三日三晩働きつめでも倒れない体力だとか、一子相伝の武術の達人だとか、

体の半分が機械だとか、目の前のコイツみたいな従軍経験だとか……はたまた、オレみたいに人外の血が流れていたりだとか。

そういう一癖も二癖もある連中が、社会の裏には相当数いる。そんな連中が好き勝手に暴れたり、犯罪行為に手を染めたりしないよう、相互監視しつつ、"力"を使った仕事を斡旋し、"能力者"の生活を安定させているのが、"派遣会社"ってワケ。

「なあ。お互いの実力が知れたところで手打ちにしなないか?」

「ぬかせ。久々の大物だ! お前を狩って名を上げてやるよ!」

「あアそう」

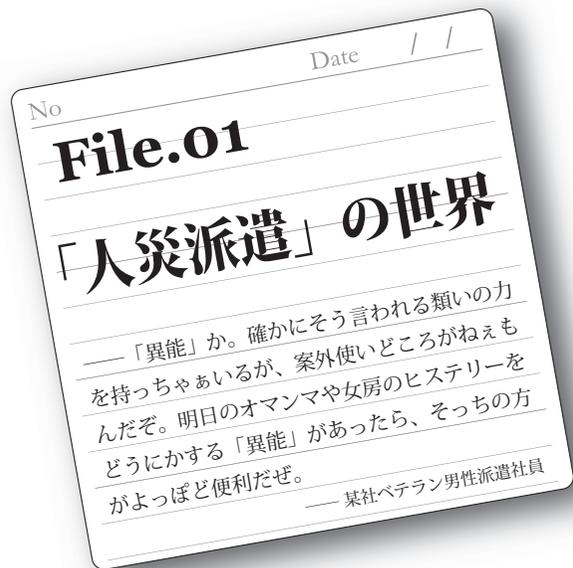
みみしと伸びる犬歯が、口腔を圧迫し変形させていく。

人が折角穏便に済ましてやろうと思ってるのによ。

こちら連日のお断りメールでむしゃくしゃしてんだぞ?

「……だったらこっちも全力で行かせてもらうよ。コウカイシテム……おソイカラナ!」





1-1. この本はどんな本？

この度は、本書、「人災派遣 RPG」をお手にとつてくださり、まことにありがとうございます。

本書は、現代社会の裏側で、普通の人から見るとちょっと変わった力や技術——「異能」を持った「派遣社員」となり、時に激しく、時に忙しく、時にせせこましく、日々の糧を稼ぐために働く生活を仮想体験するテーブルトーク・ロールプレイング・ゲーム (=TRPG) のルールブックです。

……いきなり何やらガッカリするような単語が幾つか並んでしまいましたが、この「人災派遣 RPG」では、強大な超能力を持ったキャラクターが登場する多くのゲームや物語と違い、世界の命運を賭けた戦いに臨んだり、悪の秘密結社と死闘を繰り広げたり……といった、ヒロイックな展開とはあまり縁がありません。

「人災派遣」の世界は、「異能」を使って社会を混乱させたり、「異能」によって一般人に被害が及んだりしないよう、〈「異能力者」同士の相互監視が徹底している社会〉です。周囲の被害や人目を気にすることもなく、「異能」を好き放題に使うような輩がいれば、「異能力者」の社会全体が排除するために動きます。

そのため、「異能力者」達は、超常的な力や技術を持っていてもそれを自由に使うことができず、現実世界の我々と同じく、生活や家族を守るために日々の糧を求め、会社に所属し、社会の一員となって仕事に従事することになります。

彼等と我々の違いは、〈「異能」を表の社会にバレない程度に使用して、現実では達成不可能な仕事や、危険な案件をこなせてしまう〉点だけです。

本書では、そうした〈メチャクチャな仕事を解決する異能力者〉と、その〈依頼を受けて異能力者を派遣する人材派遣会社〉の物語を仮想体験するために必要な遊び方と舞台を紹介しています。

——さあ、人智を超えた「異能」が飛び交い、想像を絶するトンデモな仕事が続々と舞い込む、「人災派遣」の世界に飛び込む覚悟はできましたか？

…
……
…………できたようですね。
それでは改めて——

ようこそ！「人災派遣」の世界へ！

1-2. 「人災派遣 RPG」の舞台

「人災派遣 RPG」の舞台を一口で説明すると、〈我々の知らないところで、実は様々な「異能」を有する者達——「異能力者」が活躍している現代社会〉と言うところでしょうか。

この世界で生きている人々の生活や文化、法律、モラルなどは、基本的に現代社会に即しています。

物語の中心となる「異能」の由来は様々です。妖怪や古代に栄えた超文明の末裔など、元々人間以上の力を宿した種族だったり、突然変異によって生まれた超能力者だったり。たゆまぬ修業によって常人を遥かに超えた技や知識を身に着けた者も、「異能力者」と呼ばれています。

何十年か昔であれば、「異能力者」達はその絶対的な力により、神か悪魔か英雄か、と言われてもおかしくない存在でした。

ですが、科学と社会の急速な発展により、個人の持つ「異能」が社会に与える影響は小さくなる一方——たとえば、吸血鬼と言えればかつては不死身と無敵の代名詞でしたが、その能力が解析された今、対異能用の装備に身を固めた吸血鬼ハンターや軍人なら充分対抗できますし、武術や魔術といった古くから伝わる秘術にしても、科学的な鍛錬や装備で同等以上の能力を獲得することが可能なのです。

現在では公安や警察の「異能」対策も充実しており、「異能力者」と言えど、犯罪を犯せば普通に取られられるようになってしまいました。

〈最早、「異能」を好き放題使って、傍若無人な生き方ができる時代ではない。「異能」を使って世間を騒がさないよう気をつけつつ、普通に生活していく方が良い〉——そんな考えが「異能力者」達の間には浸透していきます。

このような考えの「異能力者」が多数派を占めるようになった結果、〈暴走する「異能力者」を排除したり、未然に防ぐために相互監視するための組織〉が「異能力者」達の社会に形成されていきます。

これが、「派遣会社」の前身である「互助会」です。

1-3. 「派遣会社」の成立と役割

「互助会」は、単に暴走者を排除・監視するだけの組織ではありません。

生き方の解らない「異能力者」を保護して社会に適応させる、「異能」を隠して暮らすストレスを軽減させる、などの後援活動も行っています。

援助と排除、アメとムチを使い分けることで、「互助会」は〈「異能力者」の社会全体を安定させること〉を目指します。

無論、そうした活動は無償では成り立ちません。「互助会」はほどなく、活動と組織の維持のために最適な方法——〈適度に「異能」を使って厄介なトラブルを解決し、ちょっとだけ高額の報酬をいただく〉——を編み出します。

これは、「異能力者」にとっては「異能」を生きる糧に利用できて心身とも充足する、「互助会」にとっては「異能力者」をまとめることで管理しやすく維持費も稼げる、「社会全体」にとっては「異能力者」の犯罪が減って面倒なトラブルも解決できる、と、関係者全てにとってうまく機能しました。

こうして、〈「異能力者」を派遣する業種〉は順調に成長を続けていきます。需要が増し、供給が伸び、利益が出て、所属する「異能力者」も増え、事業を拡大し、法人化し——こうして、「互助会」はより一般社会と近い「派遣会社」という形に進化していったのです。

このように、「人災派遣 RPG」では、「派遣会社」が〈異能力者が暴走しないように管理する〉〈異能力者に仕事を与え、生活を守る〉という役割を担っているが故に、人智を超えた「異能力者」が多数存在していても、社会が大きく混乱することなく、なんとか安定を保つことができているのです。

1-4. 「仁義」

「派遣会社」は、国内だけで大小 1000 以上はありとされ、それぞれ創立の経緯も営業方針、企業理念なども会社毎に違っています。

ですが、その本質はやはり〈異能力者の社会を安定させるための組織〉であり、その大目的を達するために必要な最低限のルールが、自然発生的に形成されていきます。

これが、「仁義」と呼ばれる不文律です。



たとえば、〈業務と関係のない人には、「異能」の存在を明かさない〉〈業務上の争いで、不用意な命の取り合いはしない〉〈業務上敵対関係にあっても私生活上の知人や友人を巻き込んでほらない〉〈業務中、会社間で行われた取引や約束を一方向的に破ってはならない〉 などなど……。

細かく挙げていくときりがありませんが、「仁義」の存在理由を大雑把にまとめると、〈異能の存在を隠す〉〈対立関係をエスカレートさせない〉の2点に集約されます。

〈異能の存在を隠す〉点については言わずもがなですが、後者も「人災派遣」の世界で非常に重要な意味を持っています。

何しろ、本気で殺し合おうと思えば幾らでもできるのが「異能力者」です。もし、憎悪の連鎖が際限なくエスカレートしていけば、それこそ世界大戦規模に戦禍は拡大していくでしょう。

それが解っているのに、要人誘拐や暗殺、テロ代行といった犯罪行為を請け負う「悪党」の「異能力者」や「派遣会社」も、最低限の「仁義」は守るのです（少なくとも表向きは）。

もし、「仁義」を破るようなことがあれば、その「異能力者」は「ならず者」として、表の社会だけでなく、裏の社会でも鼻つまみ者になってしまいます。危険分子として、一切の「派遣会社」から雇用を拒否され、地域から排除——場合によっては「異能力者」の始末人の手により、文字通りの意味で——されてしまうことにもなりかねません。

「仁義」は、「異能力者」の社会において、それほど重要な意味を持つ概念なのです。

1-5. 「仁義」との付き合い方

「仁義」は絶対に守るべきルールではありませんが、仕事や状況によっては、どうしても「仁義」に抵触しかねない場合もあります。

〈人命がかかっているのに、多少の人目があっても治療系の異能を行使する〉〈緊急を要する案件のため、高速飛行する異能で文字通り現地へ向かった〉〈仁義破りを辞さないならず者に対抗するため、全力を出さねばならなかった〉など。

そのようなやむを得ない事情による「異能」の行使は、「派遣会社」側も斟酌してくれますし、ある程度ならフォローもしてくれます。

〈テレパス能力者が目撃者の記憶をあやふやにしてしまう〉〈クラッキングのプロが関連情報を片っ端から消してしまう〉と言った具合です。

とはいえ、どうせフォローしてもらえるから、と思うのは誤りです。このような情報操作にはかなりの手間と費用がかかりますから、フォローが度重なると「派遣会社」側もいずれは見放してしまうでしょうし、かなりの額の罰金を科す場合もあります。

こうした、「人災派遣」世界における行動の制約については、p60【File.4 任務の進め方】の中で、ルールやデータとして反映されています。

1-6. 「派遣会社」と一般社会

「派遣会社」は、「異能力者」の社会の安定剤として機能している面もありますが、一方で利益を上げて事業を拡大したり、社員や契約社員の生活を向上させたりする目的をもった営利団体でもあります。

無茶な仕事も請け負う、とはいえ、業務自体は現実の人材派遣業とそう変わりありません。

人手や技術、経験の不足している現場に経験豊富な人材を派遣して紹介料を受け取ることと、派遣社員の教育や福利厚生をサポートして質の向上を図ることが主な業務です。

現在では「派遣会社」や「仁義」が社会の安定に貢献していることを政府や警察も充分認識しているため、「派遣会社」各社は比較的自由に事業を展開しています。

「異能」のことをまるで知らない一般人でも、〈どうやっているのかは知らないが、かなり無茶な依頼でもなんとかしてくれる派遣会社〉という程度には認識していて気軽に依頼に訪れますし、薄々気がついてうまく利用している者もいるようです。

しかし、マスコミやネットなどに「異能」についての情報が上がることはまず、ありません。

「異能」の存在が公になった場合、社会にどんな混乱が訪れるかは、想像に難くありません。そうなるのは困る「派遣会社」、政府や公安、大手マスコミなどが協力し、メディアにのぼらないよう徹底した隠蔽工作が行われているのです。

このようにして、〈「派遣会社」と「異能力者」は一般社会に密かに溶け込み、緩やかに受け容れられている〉——そんな社会が、本作の舞台です。

1-7. 「人災派遣」世界の楽しみ方

「派遣社員」達は、「派遣会社」による厳しい管理と「仁義」という裏社会の常識に基づいて行動しなければならないため、自ずとその行動指針は制限され、任務の中でも自制や歯止めが要求されます。

逆に、「派遣会社」と「仁義」に守られている面もあるため、仕事に失敗したからといって、命を落とすようなことはそうそうありませんし、ましてや世界や人類が滅亡の危機に瀕するといった事態も、あまり起こりません。

「人災派遣 RPG」では、仕事や解決方法がちよっとばかり特殊ではあっても、それに関わる人々の行動理由は、「利益を上げる」「生活を守る」「自己実現をする」「名声を勝ち取る」と言った、〈現実世界と変わらない〉ものです。

〈敵も味方も、立場は違えどそれぞれの生活のために働いているだけで、絶対的な「正義」も、絶対的な「悪」もない。だから生死をかけるほどの「縛

◆コラム◆ 「人災派遣シリーズ」は マルチメディアで展開中!

「人災派遣」シリーズは、当サークルの主宰、紫電改氏が発表してきた同一の背景をもとにした一連の作品群で、これまでに小説、CD ドラマ、市販システムを用いたTRPGプレイなど20点に及ぶ作品が発表されています。

本書は、「人災派遣」世界を舞台にしたストーリーを楽しむためのツールとして作成されており、本書単体でもお楽

りもない) —— 「異能」を使った痛快なアクションやストーリー、緊迫した展開を期待している人には、こんな背景は邪魔に思えるかも知れません。

ですが、本作ではそうしたオーソドックスな物語とは、**少し違った視点の楽しみ方を提案します。**

現実の社会では、利権、派閥、政治、国益、宗教、感情等々、様々な事情が複雑に絡み合っていて、**解決することのできない諸々の理不尽**——〈なんでウチの商品が売れないの?〉〈こんなことで企画がポシャるとかあんまりだ!〉という身近なものから、〈どうしてあんな大事故を防げなかったの?〉〈なんであんな悪いことした奴が捕まらないの?〉〈なんであんな悲惨な事件が未解決なの?〉といった大きなものまで——**を、「異能」という特別な力で快刀乱麻を断つ如く解決する。そんな楽しさ、そんな物語を本書では提案しています。**

「異能」という奇想天外な力と、「世界」や「事件」、「登場人物」の身近さ、現実感。一見、相反するようなこの2つの要素が組み合わさったときに生まれる一風変わった物語を、本作で是非、体験してみてください!

* * *

以上で、駆け足ではありますが、本書の舞台についての解説を終了します。

次章では、「人災派遣 RPG」の遊び方について、ゲーム的な側面から解説していきます。

しみいだけですが、既刊シリーズに触れていただければ、より本書の世界観を身近に感じ、プレイに臨場感を付与することができますでしょう。



「人災派遣」シリーズ既刊は、下記「猫又公司」公式サイトにて閲覧または通販が可能です。

まだ「人災派遣」シリーズに触れたことがないみなさんは、ぜひ下記サイトへアクセスしてください!

■猫又公司公式サイト

<http://nekomatatosi.com/>